

血液透析患者の退院支援に関する一考察 ～医療依存度が高い事例を通して～

医療法人衆和会 長崎腎病院

○堤みつ代 吉野亜須沙 田端満美子 下田美智子 丸山祐子 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

当院では通院困難な透析患者を入院で受け入れており、彼等の退院支援は切実な課題である。今回、血液透析・気管切開・経管栄養と医療依存度が高い長期入院患者の退院支援の困難さを体験したので報告する。

【症例】

70代男性、軽度の認知症あり。60代の妻がキーパーソンで2人暮らし。

【経過】

目標を「自己吸引指導を行い外出や外泊、退院ができるように支援」としたが患者は拒否的であったため、妻へ指導を行った。妻も最初は拒否的であったが、吸引手技の確立に至った。また、ADL向上に向けて離床を積極的に行い車椅子での座位が可能となり、また看護・福祉サービスの連携により短時間の外出が可能な環境を整えたが、患者と妻の不安は依然強く、結局外出や退院は実現できていない。

【考察】

日々のコミュニケーションと退院環境整備により、看護師と家族・患者間の関係が構築できたと思っていたが、最終的に退院に結び付けられなかった。医療処置が必要な患者の退院には、判断力と実行力を有するキーパーソンが必須であることを痛感した。